

淡路

古名

櫟

觀阿弥作

季は	地は	ワキ	前
春	淡路	シテ	官人
		ツレ	シテ
		田作る翁	田作る翁
		伊奘諾尊	田作る人
		前に同じ	後

「治まる國の始めもや。く。淡路の神代なるらん。

詞
「そもそも是は当今に仕へ奉る臣下なり。さても我宿願の子細あるにより。住吉玉津島に参詣仕りて候。又よきついでなれば。是より淡路の国に渡り。神代の古跡をも一見せばやと存じ候。

道行
「紀の海や。波吹上の浦風に。く。跡遠ざかる沖つ舟。汐路程なく移りきて。よそに霞みし島影や。淡路潟にも着きにけり。く。

詞
「急ぎ候ふ程に。是は早淡路の国に着きて候。此所の人を待ち。神代の古跡を尋ねばやと存じ候。

シテ、ツレ一聲
「神の代の。跡を残して海山の。のどけき波の淡路潟。

ツレ
「種を收めし國なれば。

二人
「苗代水も豊かなり。

シテサシ
「夫れ陰陽の神代より。今人界に至るまで。

二人
「山河草木国土は皆。神の恵みに作り田の。雨つち

くれを湿して。千里万里の外までも。皆たのしめる時とかや。

下歌
「頃しも今はのどかなる。心の池の云ひがたき。春のけしきもさまぐに。

上歌
「春の田を。人にまかせて我はたゞ。く。花に心のあこがるゝ。盛りに引かれて苗代の。水に心の種蒔きて。散ればこゝもや桜田の。雪をもかへすけしきかな。く。

ワキ詞
「いかに是なる翁に尋ぬべき事あり。おことの風情を見るに。小田をかへしながら水口に幣帛を立て。誠に信心のけしきなり。いかさま是は御神田にて候ふか。

シテ詞
「さん候春の田を作らんとては。よろづ悦ぶ事の候ふ程に。あの水口に五十串とて五十の幣帛を立て。神を祭り候。然ればある歌に。谷水をせく水口に五十串たて。苗代小田の種まきにけり。其上此御

田は。当社二の宮の御供田にて御座候ふ程に。殊には内外清浄にて御田を作り候ふよ。

ワキ 「さては当社二の宮にてましまさば。國の一の宮はいづくにてましますぞや。若し櫻葉の權現にて御座候ふやらん。

シテ 「恐れながら悪しく御心得候ふ物かな。当社は二の宮にてましませばとて。國中二の次第にあらず。

ツレ 「御覽候へ当社の神達。二柱の社の御殿なれば。

シテ 「二つの宮居を其まゝにて。一の宮とあがめ奉るなり。

二入 「是は即ち伊奘諾伊奘冊の尊二柱の。神代のまゝに宮居したまふ淡路の國の。神は一きう宮居は二つの。二の宮とあがめ申すなり。

ワキ 「よくよく聞けば有難や。さてくかかる国土の種を。あまねく受くる御恩徳。只此神の誓ひよなふ。事あたらしき御誕かな。国土世界や万物の。出生

あまねき御神徳。唯是れ当社の誓ひなり。

ツレ「然れば開けし天地の。伊奘諾と書いては。

シテ詞「たねまくとよみ。

ツレ「伊奘冊と書いては。

シテ詞「たねを收む。

ツレ「是れ目前の御誓ひなり。

シテ「其上神代は遠からず。

ツレ「今日の前にも。

シテ「御覽ぜよ。

地「種を蒔き。種を收めて苗代の。く。水うらゝにて春雨の。天よりくだれる種蒔きて。国土も豊かに。千里栄ふる富草の。村早稻の秋になるならば。種を收めん神徳。あら有難の誓ひやな。有難の神の誓ひやな。

ワキ詞「なほく当社の神秘ねんごろに御物がたり候へ。

地クリ「夫れ天地開闢の昔より。渾沌未分やうやく分れて。

清く明らかなるは天となり。重く濁れるは地となり。れり。

シテサシ

「然れば天に五行の神まします。木火土金水是なり。

地

「既に陰陽相分れて。木火土の精伊奘諾となり。金

水の精凝り固まつて伊奘冊と顯はる。

シテ

「然れどもいまだ世界ともならざりし先を伊奘諾と

いひ。

地

「国土治まり万物出生する所を伊奘冊と申す。即ち

此淡路の国をはじめとせり。

クセ

「さればにや。二柱の御神の。磧馭盧島と申すも。

此一島の事かとよ。凡そ此島はじめて。大八島の國をつくり。紀の国伊勢志摩日向並に。四つの海岸を作りいだし。日神月神蛭子素盞鳴と申すは。

地神五代のはじめにて。皆此島に御出現。中にも

皇孫は。日向の国に天降り給ひて。地神第四の火火出見の皇子を御出生。實に有難き代々とかや。

シテ
「天下をたもち給ふ事。

地「すべて八十三万。六千八百余歳なり。かゝるめで
たき皇子達に。御代を喰鶴羽の。權現と顯はれお
はします。伊奘諾伊奘冊の神代も。只今の国土な
るべし。

ロンギ地

「實に神の代の道直に。く。今も妙なる秋津洲の。
君の御影ぞ有難き。

シテ
「御影ぞと。夕日がくれの雲の端に。たなびく天の

浮橋の。いにしへを顕はして。御客人をなぐさめ
ん。

地「そも浮橋のいにしへと。聞くはいかなる言の葉の。
シテ
「其神歌は鳥羽玉の。我黒髪も。

地「乱れずに。結び定めよ小夜の手枕の。歌の種蒔き
し。神とも今は白波の。淡路山を浮橋にて。天の
戸を渡り失せにけり。く。
(中入)

「實に今とても神の世の。く。御末はあらたなり

けりと。いへば虚空に夜神樂の。月に聞えて光さす。けしきぞあらたなりけるや。けしきぞあらたなりける。

後ジテ

「わたづみの挿頭に刺せる白玉の。波もて結へる淡路島。月春の夜ものどかなる。緑の空も澄み渡る。天の浮橋の上にして。八島の国を求め得し。伊奘諾の神とは我事なり。治まるや国常立の始めより。」

地

「七つ五つの神の代の。」

シテ
「御末は今に君の代より。」

地
「和光守護神の扶桑の御国に。風は吹けども山は動ぜず。」

ロンギ地

「げに有難き御誓ひ。く。そもそも天の浮橋の。其御出所はさるにても。いかなる所なるらん。」

シテ
「振り下げし。鉢の滴り露凝りて。一島となりしを。」

淡路よと見つけし。こゝぞ浮橋の下ならん。」

地
「げに此島の有様。東西は海漫々として。」

シテ
「南北に雲風をつらね。

地
「宮殿にかかる浮橋を。

シテ
「立ち渡り舞ふ雲の袖。

地
「さすは御鉢の手風なり。引くは潮の時つ風。治まるは波の蘆原の。国富み民も豊かに。万歳をうたふ松の声。千秋の秋津島。治まる国ぞ久しき。

く。
。